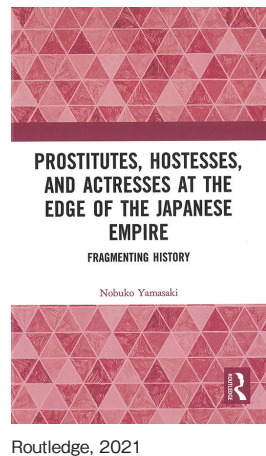


山崎信子

『日本帝国の周縁における娼婦・酌婦・女優
——断片としての歴史』Nobuko Ishitake-Okunomiya Yamasaki, *Prostitutes, Hostesses, and Actresses
at the Edge of the Japanese Empire: Fragmenting History*

堀口典子



「大日本帝国」の公式的な物語には「家族国家」、国粹的ロマンスの観念が含まれるが、そこに居場所を見つけることができず、周縁で生きた娼婦、酌婦、女優の経験や物語は多くの場合、国辱として沈黙させられ、存在しないかのように扱われてきた。山崎信子の著書 *Prostitutes, Hostesses, and Actresses at the Edge of the Japanese Empire: Fragmenting History* (以下 *Fragmenting History*) は、日本帝国の「マスターナラティブ」(master narrative) に取り込まれず、「国文学」のジャンルにも含まれることがなかった女性の声と物語、また、直線的な発展の歴史ではなく、「断片」に焦点を当てた文学作品、映画を解析している。分析されている作家作品は、描写する時系列・空間、ジャンルは異なるが、共通項は日本帝国の歴史、遺産(レガシー)に関心をよせ、鋭く介入していることである。

当該書は五章によって構成され、中島敦(一九〇九〜一九四二)、林京子(一九三〇〜二〇一七)、山口淑子(一九二〇〜二〇一四)、テレサ・ハッキヨン・チャ(Theresa Hak Kyung Cha, 一九五一〜一九八二)、李良枝(Yi Yang Ji, 一九五五〜一九九二)の四人の作家と一人の女優の作品をとりあげる。その分析にあたり、二つの異なるグループに分け、日本国民としての臣民と、植民化された臣民(つまり強制的に日本臣民に組み込まれた国外の民族)、さらにポストコロナアルの経験と作品を考察し、周縁に置かれた日本人女性、また、植民化された臣民男女に焦点を当てている。

Fragmenting History は、日本帝国の周縁に置かれた臣民を描写した作家と彼の地で活動した女優を分析することにより、直線的、目的論的、論理的に理解されてきた歴史の軌道を解体し、断片的

な物語、沈黙に焦点を当て、社会的に共有された感情 (Affect) を考察する必要性を説いている。当該書の背景にあるのは、戦前・戦中に植民地化された臣民に対する人種差別、性差別が戦後日本で未だ蔓延するという問題意識であり、それを変革するには、国外からの批判を受け入れるだけでなく、日本の共同体内部から、人種主義差別、性差別を考察すること、植民地化された臣民をあつかう文学作品、映画が重要な手段であることを指摘しているのである。

中島敦の文学作品は広く知られているが、国家が認定した教科書に掲載されてきた作品は、「国文学」における「代表的な小説」に含まれる作品のみで、植民地朝鮮、大連、太平洋に関する中島の考えは、深く掘り下げられてこなかった。 *Enguening History* は、中島が日本人男性として植民地朝鮮で育ち、後に植民地の官吏としてパラオ南洋庁に派遣されたことに着目し、日本帝国の抑圧的な思想や行為を内包する物語に対し、中島がニュアンスを持つて批判する方法を身につけ、検閲を逃れる作品を執筆していたと指摘する。当時の日本のマルキシズム作家とは異なり、中島は日本帝国の臣民を統一された単一的な大衆としてではなく、個性をもって構成されたモザイクとして描き、朝鮮人、パラオ原住民等、植民地化された人々の年齢、職業、社会的地位といった個別性に関心を寄せることにより、エスニシティの概念に重層的多様性を賦与したのである。 *Fragmenting History* は、中島の日本帝国言説に対

する批判的な眼差しの原点は、短編「巡査の居る風景」(一九二二)にあると位置づけている。帝国支配の有効的手段としての言語教育があることを理解していた中島は、言語にはアイデンティティを集団的に構成し、人々を修練、従属させ、支配する力があること、さらに「沈黙」が帝国において存在するが知られることのない他者の経験を示していることを、小説において描いていた。「巡査の居る風景」では、従属に迎合することを要求された朝鮮人が、日本帝国の中での地位を得るため、自らを支配する帝国の言説を支持し称賛することの空洞性を表したが、皮肉にも、中島の小説が批判した帝国の歴史や政治は、国家が認定した国語教科書に掲載された時、修辭的にも戦略的にも取り込まれ、批判は隠蔽されてしまったと *Fragmentary History* は指摘する。

山口淑子は、日本人だが満州で生まれ育ち、李香蘭、リー・シャンラン、大鷹淑子、シャーリー山口の名で知られ、複数の言語を話すマルチリンガルの女優、歌手、政治家として活躍した。日本語、中国語、ロシア語を話し、日本を「祖国」、中国を「母国」と呼び、言語、文化、民族、人種的に複雑性を備えた女性であった。山口淑子(李香蘭)は、女優として満州映画協会(一九三七〜一九四五)製作の多くの作品の中で中国人女性を演じ、初めは反日感情を持つが、寛大な日本人男性と恋に落ち、次第に親日的な中国人女性に変化するという役を演じた。このように、

日本帝国にとって従順で都合の良い「他者」を演じることになるが、主役を務めることにより、日本帝国の言語的、文化的同化政策の最前線に位置していた山口淑子・李香蘭は、日本の植民地政策・理念の一つである「五族協和」を体現し、「満洲国」の下、日本、満州、漢人中国、モンゴリア、韓国の人種同化の役割を担う理想的な存在であった。つまり、山口淑子・李香蘭が演じる日本・中国という二重性を備えた文化的ネイティブのアイデンティティを「大日本帝国」の文脈に照らし合わせると、言語、国家、民族、人種の境界を越境し拡張する「大東亜共栄圏」の近代における幻想を体現していたことになる。映画『蘇州の夜』（一九四一）が特筆に値するのは、日本人と被植民者間の恋愛、家族的な関係を奨励していた「五族協和」のイデオロギーから逸脱しながら、ドイツの優生思想と重なる理念を支えていることである。例えば、この映画では、日本人男性加納と中国人女性梅蘭との恋愛が扱われながら、最終的に婚姻が拒否され、王民と梅蘭という中国人同士士の結婚に至る。かかる中国人同士の結婚が示唆していることは、植民地人の婚姻は、人種間（日本・中国）でされるべきではないという考えであり、さらに、中国人女性のセクシュアリティ、特に人種間の「混血児」の再生産能力に対する恐怖であるとする。日本人医師の加納は、中国人女性の梅蘭に対する私的な愛情以上に中国の「公衆衛生」と救済という大きな使命感から、近代的な西

洋医学に生涯を捧げ、さらに、中国人との結婚の拒否により日本の純粋性を保持している。この映画で強調されていることは、加納の「近代的」な個人の主体性、大きな公的な「愛」に基づく「選択」と力は、「先進国」日本の優位とともに、過去の因習に縛られた「後進国」中国の抑圧性、劣位を暗示していると *Fragmenting History* は分析している。

林京子は、日本人の両親の元、日本で生まれたが、上海の日本人コミュニティで育ち、バイリンガル作家として活躍した。長崎原爆被爆者として、日本国家に対し批判的な視点で執筆し、一九七八年には「被爆者としては国からの荣誉を受けるわけにはいかない」と文部大臣芸術選奨受賞の内示を辞退した。被爆者としての経験から、ナシヨナリズム、人種主義、性差別により、社会的、経済的周縁に置かれた人たち、特に女性に対し近親的な理解に至り、国家権力維持のために、身体が犠牲にされることの問題提起をした。*Fragmenting History* が解析するのは、林京子が作品の中で表現した国家形成が内包する人種主義、階層主義、性差別の要素、また、国家に対する否認、拒否の感情、思想、行為である。特に「上海もの」は、林が上海で見聞した人種（日本人・中国人）関係が歴史的、社会的に形成され変化する過程における権力の介入が背景にある。戦中一九四〇年代に上海に在住した日本人は、国の意識が強く、国家の理想から逸脱した存在や行動は、

国辱とみなされたが、特に「黄砂」（一九七七）では、日本人としての誇りを持つ中産階級の妻や母親と、日本人娼婦の「お清さん」が対照的に描かれている。「お清さん」は上海の街の公共の場で無差別に中国人クーリーにも身を売る「日本人らしからぬ」行為により、「国」、「人種」、「階級」といった境界を犯し、「大日本帝国」下において、上海日本人コミュニティの内部における「外部」という位置を占める。お清さんは「国辱」、「国賊」と呼ばれ、蔑み忌諱すべき対象として扱われるが、「お清さん」を友人と呼ぶ日本人少女の語りは、日本社会の内部における排除という「暴力」を詳細に描く。このようにして「黄砂」は、「国」という意識が形成される過程で、外国人・外部に向けての排除だけではなく、共同体内部でも排除の力が作用し、「国」意識、知識形成が孕む暴力を静かな筆致で描いた、と山崎信子は分析する。

李良枝は、日本で生まれ育ったが、ソウルで学び、在日朝鮮人女性として初めて芥川賞を受賞し、東京で没した。Fuguening History は、李良枝の作品が男性的ナシヨナリズムの言説に特有な直線的な時間の軌道を混乱させ、言説の過程を横断、切断、省略することにより、新しい物語を生み出したという視座から作品分析を試みている。なかでも短編「かずきめ」（一九八三）は、日本国家の物語と歴史学の常識を混乱させ、全ての感情の裏には歴史があることを示す作品である。「かずきめ」では、在日韓国女人

性の母と「彼女」の身体が主体構築の政治的闘争、交渉の場として描かれ、身体という媒介を通じて、在日韓国人の帰属の場所、歴史が刻まれている。母と「彼女」の身体と主体の意識、形成は対照的に描かれ、母は二度目の日本人男性との結婚生活を送る中で着物を毎日着ることにより日本人との同化を図るが、「彼女」は国家の生殖力としての「母」の再生産の役割を拒否している。二十歳の誕生日が近づくにつれ、「彼女」は日本国民を国家・市民社会の将来へと導く通過儀礼である成人式を拒否し、代わりに個人の儀式として自らの身体の子宮の除去を試みる。重要な国家儀式の拒否は、母性と再生産の可能性を否定するだけでなく、再生産器官・機能を取り巻く父権的な言説を根絶させる試みがある。Fuguening History は解析する。「彼女」の感情、行為の背景として、韓国人が共有する集団の記憶・トラウマ、優生法による断種政策の歴史を挙げ、「彼女」は日本人による民族浄化の恐怖に怯え、幻影に取りつかれていると分析する。韓国人であるために日本人に殺害され、韓国人の子孫の数が日本で増えないよう、韓国人女性の子宮が日本人の医者によって除去されようとしているという「彼女」の幻想と集団の記憶が重ね合わされている。「彼女」の想像で再び蘇る日本帝国の歴史、その歴史の観念に支配された女性の身体を読み解くことにより、Fuguening History は「かずきめ」が日本の生物学的・政治的権力に抵抗し、日本人の民族

人種、国家構築の行為・儀式を批判的に再考していると捉えているのである。

テレサ・ハッキヨン・チャは、大韓民国釜山で生まれたが、アメリカ合衆国カリフォルニアに移住、芸術家、作家として活動し、ニューヨークで夭逝した。チャは視覚アーティストとして、アバングャルドのバフォーマンズやインスタレーションの映像、写真、彫刻、詩など、多様な作品を制作したが、特に試作的著作である自伝的小説『ディクテ (Diced)』(一九八二)で知られる。この作品では、文字表象と、写真・毛筆などの視覚表象、神話と真実を並置することにより、ジャンルの既存概念を根本から問い直している。時間は断片的に描かれ、語りの視点は常に変化し、複数の言語(英語、フランス語、韓国語、中国語、日本語の漢字)で書かれている。このように、時空間の境界を越境する断片的で、多言語的テキストを織りなすことにより、個人の、そして、集团的・文化的に共有された、境界に立つ経験を追跡していくのである。『ディクテ』で描かれる教員のヒュン・スン・ホー(Hyung Soon Ho)は、満州で生まれ、一九二二年に朝鮮からの亡命者である一世の親の元に生まれた。日本帝国の臣民として課された彼女の使命は、帝国主義的教育制度に基づき、朝鮮人の子供を従順で誠実な、日本帝国に奉仕する臣民に養成することであった。教育勅語は、民族的には朝鮮人である子供も日本帝国天皇の赤子である

という概念を植え付けるものであり、日本語学校は日本帝国の理想を教育し、広げる地盤であった。ところが教員であるホーは日本帝国の任務に反し、臣民としての使命を、朝鮮人としての使命とすり替え、使用を禁止されている母国語朝鮮語を取り入れたのである。日本語の使用を強要されている教員や子供にとって、朝鮮語の使用には、日本帝国の臣民ではない社会的、文化的アイデンティティを構築し、ひいては再生する力がある。朝鮮語を話すことにより、朝鮮文化を明瞭に表現し、伝え、広げ、生徒を朝鮮語によつて育成したのである。このようにして、『ディクテ』が描く、日本語学校教員の労働は、帝国の規制や支配に取り込まれることなく、朝鮮語の音声とその歴史を抹消しようとする日本語強要の暴力に抵抗し、抑制されない個人の叫びと歴史が、日本帝国の植民地主義に臆することなく生き残るのだと *Fragmenting History* は解析する。

「全体」を統一するために働く権力は、個人や「私」を支配し、検閲し、隠蔽しようとする。

また、直線的な時系列を辿る、歴史学における一般的な解説や、帝国主義的、父権的、国粹主義的公文書には欠落した声や経験がある。*Fragmenting History* の著者山崎信子は「文学の力」を信じ、文学が権力による支配の継続を中断するための交渉の場であることを示し、文学作品を分析することにより、個人の経験、記憶、

物語が、主流社会の公式の物語といかに矛盾するかを明らかにしている。周縁に置かれ、隙間に存在し、または沈黙させられてきた声や経験は、身体という媒介を通じて表現されているという視座から、国家、民族、人種、ジェンダー、性の境界に立つ身体表現を解析する *Prostitutes, Hostesses, and Actresses at the Edge of the Japanese Empire: Fragmenting History* は、学際的研究（近代日本文学、日本史、映画研究、コロンIAL、ポストコロンIAL研究、フェミニズム、ジェンダー研究）に貢献する著書である。